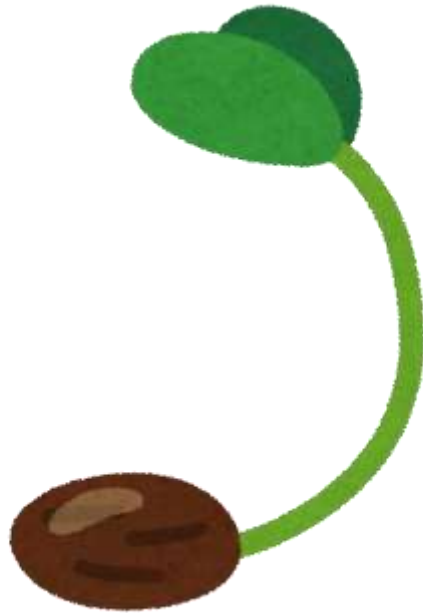


「学べる自分」を取り戻す

魔法スピンオフ事例～50代の挑戦～

意東小学校 井上賞子

50年以上眠っていた「種」の話



Sさんのこと

- 知的な遅れはない
- 重篤なディスレクシアとの診断が出ている
- 不注意も過度に高い
- 43歳まで、自分の困難を知らなかった。
- 高校を3ヶ月で飛び出し、職を転々としながら生きてきた。
- ディスレクシアだと知り、多くの葛藤の末、通信制の大学への進学を果たす。
- 現在、ICTを活用しながら、学んだり働いたりしている。



Sさんのこと

○子ども時代

- 新しいことを知るの好きだった
- 先生が話すことはみんなわかった
- ひらがなですら、すらすらは読めなかった
- 文字の読み方を必死で思い出していると、内容がわからなくなる
- みんなが簡単にできることができない自分は、どうしようもない「ばか」なんだと思ってた
- こっそりたくさんがんばった。でも、できない。かっこ悪くて「がんばった」と言えなかった。



Sさんのこと

6年生の時の先生が、読み上げテストをしてくれた。聞けばすべてわかるから95点取れた。

でも、他に誰もそんなことはしていない。先生に読んでもらうのは「ずるいこと」だと思った。

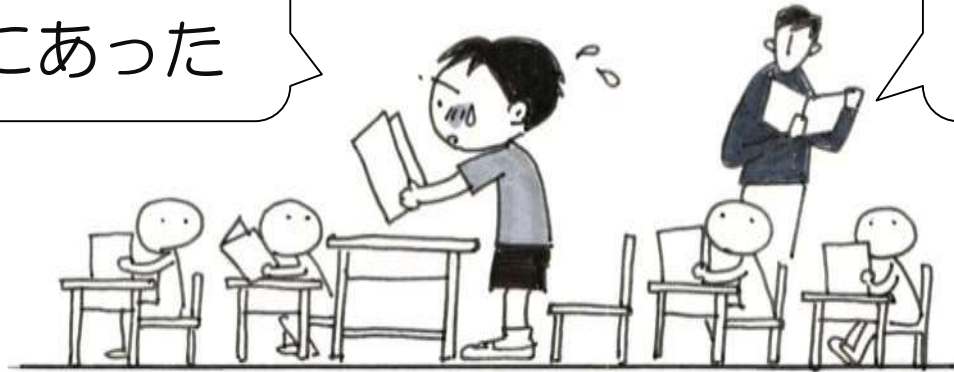


Sさんのこと

わかる

できない

「わかる」は
自分の中にあつた

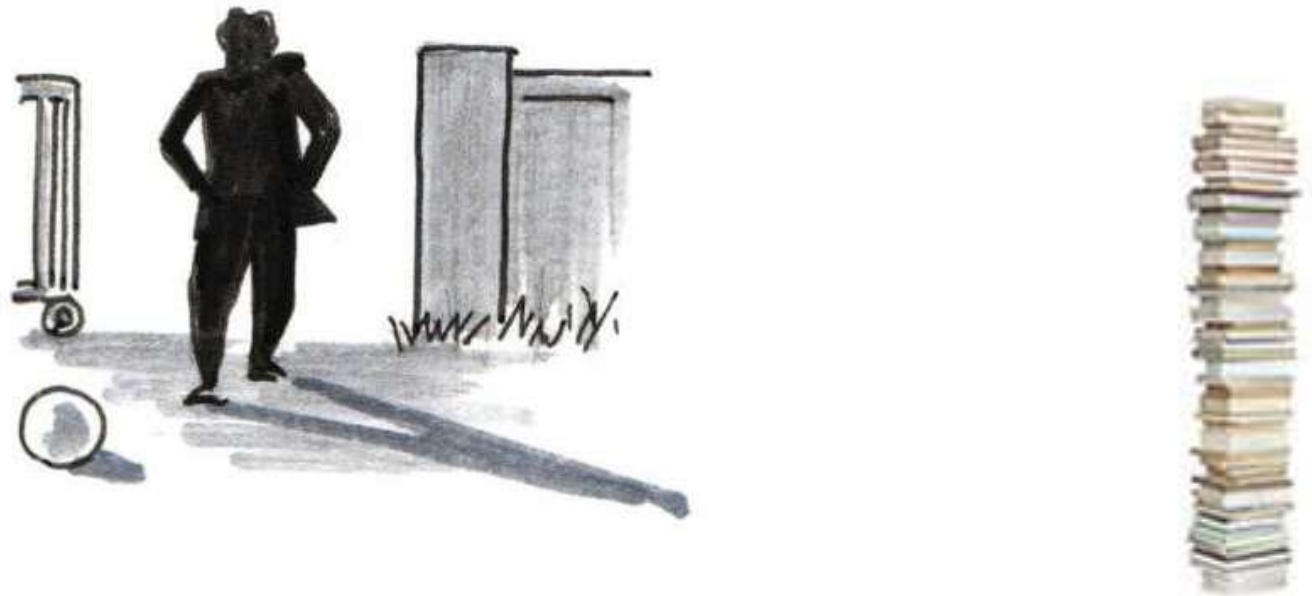


でも、見えるのは
「できない」

「わかる」は気のせい、「できない」が真実なんだ

Sさんのこと

- 中学では荒れることで、「恥をかく」時間から逃げた
- スポーツ推薦で入った高校は、「学び」がないことに絶望していけなくなった
- 16歳になる前から、年齢を偽って働いた



Sさんのこと

「学校から飛び出せば、もう読み書きをしなくていい」と思ったのに。。

「読み・書き」はどこまでもついてきた。
バシれば、そこにいられない。職を転々としていくことになる。



「読めない」「書けない」を隠すために
始まった、ICTの活用



「隠すため」のICT

- 鞆のように大きな携帯電話をすぐ購入
- その場で電話をかけてメモを取らせる
 - やっていることは「代筆」だが、「書けない」ことをバシバシにごまかせる
 - 周囲には「書いている暇がない」と吹聴し、「景気がいいなあ」と評価される



「隠すため」のICT

- ワープロの登場 → 「これで社会人になれる」
- パソコンの登場 → 「コピペでごまかせる」
- スマホの登場 → 「予測変換があれば、メールも書ける」



ICTは助けてくれた。
でも隠し続ける虚しさが残った

大きな転機



ディスレクシアだと知って

- たくさんの疑問が繋がっていった。
- 救われた気持ちもあったが、あきらめてきたことが多すぎて受け入れるのには時間がかかった。
- 勉強もしたかった、大学にも行きたかった。学ぶことのスタートラインに立ちたかった。

ディスレシア



ディスレクシアだと知って

- 「正しく読めなくても、自分には意味が分かる。それでいいんだ」と思えるようになってから、資格試験に挑戦
- 選択肢のある試験を選んで受験→合格
- 「俺はアホやなかったんや」



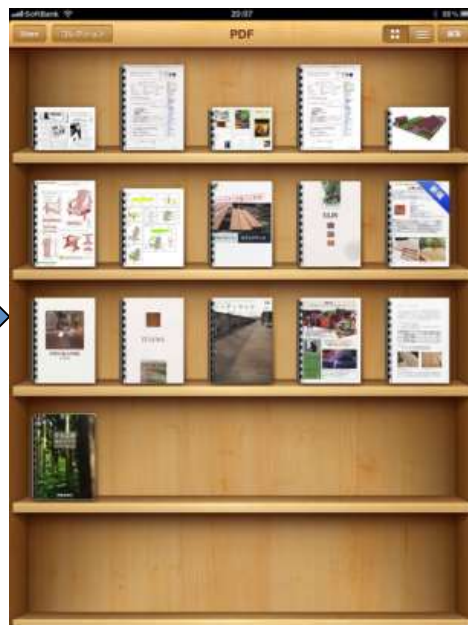
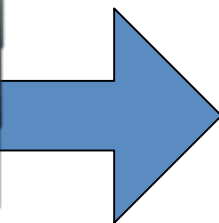
「読みたいものを読み」
「書きたいことを書く」ための
ICTの活用へ



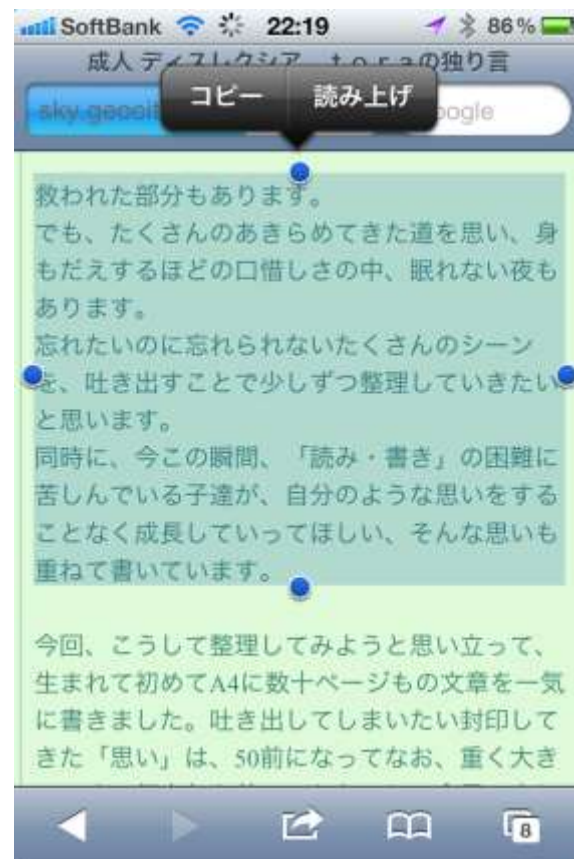
「読みたいものを読むため」のICT



両面スキャンで、PDFにし、
iBooksで読み上げ
不自然で機械的な声でも、かなり助けになる



「選択読み上げ」を使えば、長い
文章もスムーズに頭に入ってくる。



「書きたいことを書くため」のICT

- 「書かなきゃいけないから」ではなく、「書きたいこと」を書く。
- SNSでの発信、受信、つながりを楽しめるように。
- 「写真」という表現との出会い。
- 発信の場があることが、継続へのモチベーションへ
- 「予測変換は味方!」



今日の七枚 思いを込めて



ICTの活用が支えた変化

- 代替え手段を持って「読むこと」「書くこと」の機会が格段に増えた。

「日常」になっていった

→ 「書く力」「読む力」そのものが向上

→ 「書くことで発散」する場面も

困難以上に「学ぶ機会」を失って来たことが大きかったと感じている。

子ども達への指導と通じる部分

今までは・・・

Aができた



Bに進もう

Aに困難がある子は、いつまでもたってもBに進めない

「いつまでもたってもできない自分」を感じてしまう

- 意欲の減退
- 自己評価の低下



たとえば

Aが困難でも・・・



Aを補いBへ



学習機会が増える中で
Aも向上

「できる自分」を感じる

- 意欲の継続
- 機会の保障



「隠すためのICT」 →
「自分を生かすためのICT」へ

同じようにできないから使う



自分の能力を生かすために使う

自信と誇りが、活用へのモチ
ベーションになっている



諦めていた夢を取り戻す
～大学への挑戦～



新しい挑戦

- ネットでサイバー大学のことを知る
「自分も大学生になれるかもしれない」
「インターネットを通じてなら学べるかもしれない」

サイバー大学の内容は、Sさんが本当に学びたいものですか？
「大学ならなんでもいい」では、続かないと思いますよ。



「本当は、芸術系の勉強がしたい」
「でも、普通の大学には中卒の自分はいれない」



特修生という制度がありますよ。



新しい挑戦

○特修生とは

- 何らかの理由で高校に行けなかった人、中退してしまった人たちが「高卒認定試験を受けずに大学に入学できる制度」
- 特修生の期間に規定の単位を取得すれば、正科生としてその大学の大学生になれる
- 卒業すれば、正式な大学卒業資格を取得できる

「大阪芸術短期大学の通信課程に特修生の制度がある!」

「ここに行きたい!!」



新しい挑戦

- 入学前の相談
 - 学ぶための配慮が受けられるのか？
「レポートや試験をパソコンで受けたい」
- 大学側の回答
 - 今まで読み書きの困難への支援を行った実績はない
 - しかし、**そうすれば学べるというのであれば、
認めます**

子ども達の進む先は、こんなに柔軟

当初のねらい

- 苦手さを補い、学べる前提の状態を支える
- 自分に適した学び方を活用し、課題解決の方法を広げる



やっと「勉強したかったこと」を学べるスタートラインに立ったSさん。しかし、「学ぶこと」そのものの空白期間は長く、日常生活で親しんできたICTを「学び方」へ生かしていくための支えが必要だと考えた。



Sさんの学びを支えるために活用したICT

①「イメージ化」を支えるツールとして

→YouTube



②「読み」を支えるツールとして

→基本機能・・・選択読み上げ、辞書

→アプリ・・・タッチ&リード

もじかめ Scanner Pro 7



③「書き」を支えるツールとして

→メモ ※書くためにも②が必要



Sさんの学びを支えるために活用したICT

○正科生になるための条件

→特修生としての1年間で、一般教養を10単位以上とること

①レポートを提出

→受験資格を得る

②大学に行き、試験を受ける

→合格すれば単位認定



Sさんの学びを支えるために活用したICT

○レポートを書くために

- ①YouTubeで同じお題の講義を複数視聴
- ②レポート課題のキーワードをネットで検索
→動画があれば視聴
→説明ページがあれば読み上げ
- ③テキストを黙読
- ④提出する課題を決める
- ⑤そのテーマについてディスカッションする
- ⑥テンプレートに沿って入力していく
- ⑦読み上げさせて推敲する



テンプレートを活用

「・・・について成果を述べなさい」

- 「・・・」とは・・・(書き抜く)
- 成果について、以下の2点について述べたい。
 - ①・・・(書きぬく)
 - ②・・・(書きぬく)
- まず①について述べる。・・・
- 次に②について述べる。・・・
- 今回のテーマについて考える中で・・・(自分の感想)

- テーマから、書くべき内容の項目を挙げる
- Ex) 「成果と課題」なら
「成果は・・・」
「課題は・・・」
- できるだけ書きやすくするため、小見出しをつける
 - 書き始めの言葉を決める



「人に聞くのはずるいこと？」

最初のころ、テーマについてディスカッションしたり、テンプレートを作る手伝いをしたり、推敲するために一緒に見返すことを提案すると、

「それは、ずるいことじゃないのか？」

と、拒否していた。

学校で学ぶ時、

- 相談したり
- 一緒に考えたり
- 教えてもらったり
- 直してもらったり

というのは、普通にしていること、大切なのはそうしたやりとりを通じて「理解する」や「納得する」にいたることだということも、学ぶ機会を持たずにいたSさんにはわからなかったのだ。



Sさんの学びを支えるために活用したICT

○試験を受けるために

- ・試験はあらかじめ示された複数の課題の中から2問出題される

①どの課題が出るのかわからないので、すべての課題に対して、テンプレートに沿って解答を作成

②繰り返し読み上げを聞いて、内容を覚える

③作成した解答を見ながら、入力していくことを繰り返す

④問題を見て、想起して解答する練習をする



1年を終了して

- 優 → 5単位
- 良 → 2単位
- 可 → 5単位

計 12単位を取得!

特修生から

正科生へ!

いよいよ本物の大学生!!



スクーリングにむけて

大学へ、スクーリングに向けて要望書を提出

- ①メモや視写が困難なので、板書等を写真に撮りたい
- ②テキストやプリントは、見ただけでは読めないものも多いため、OCRで読み込み音声化するために、タブレットや携帯での撮影を許可してほしい
(イヤホンを持ち込みます)
- ③小テストや感想の提出など、「書く」課題の際は、携帯で文章を作らせてほしい
- ④製作に入った際などは、ノイズキャンセラー付きのイヤホンの使用を許可してほしい



スクーリングにむけて

大学へ、スクーリングに向けて要望書を提出

大学から、該当授業の先生に情報を共有

授業場面での支援

○シルクスクリーンの授業の場合

- 授業の流れの説明の際「ここはこのやり方で大丈夫?」と確認してくださった。

- 機器の使用は全てOK

「ディスレクシアについては今回初めて知ったけど、同様の支援を求めてきた学生はこれまでもいた。きっと同じ困難を抱えていたのだと思う。学べる方法を選んでいけばいい。」



スクーリング

- 書きとめる場面
- 集団で話し合う場面

書くことに困難があるということが、事前に共有されている



- 機器の利用のスムーズな受け入れ
- 「この字はこっちだよ」と、自然な声掛け

知ってもらうことで自然なサポートが受けられ、自分の学び方も尊重された。

「隠す」のではなく「知ってもらう」ことが大事



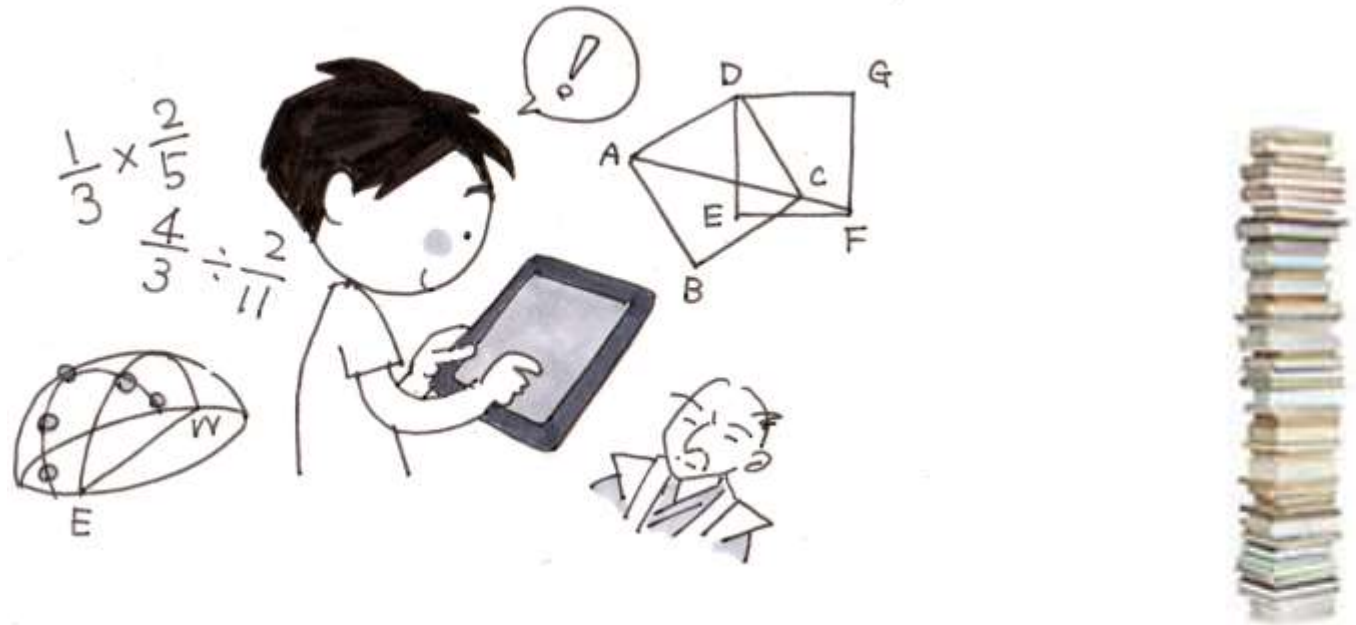
スクーリング

- ほぼひと月休みなしのスクーリング
- 安いホテルから学校まで片道1時間の満員電車、学校で学び、部屋でレポートに追われる日々
- それでも「楽しい。本当に楽しい」と彼は言った
- ここに来るまでにとても遠回りをした人生、今たくさんのかんじをとりもどしているのかもしれない



Sさんからのメッセージ

- 「将来困るよ」と詰め寄る大人たちに言いたい。子ども達の行く先は、こんなにも柔軟で、科学の進歩はたくさんの方を可能にしている。
- 「将来困る」と今を追い詰めるのではなく、「今」を支えて、未来を開いてほしい。



どの子の種も、

眠らせてしまうことがないように・・・

